



第126号

2017年6月1日発行

千葉大学教育学部  
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33



### 大学の発展とともに歩む同窓会

(変革と節目に向けて)

同窓会副会長 町田 義昭

(S 41・3卒)

平成二十八年度千葉大学は「全学的に世界で卓越した教育研究、社会実装を推進する取組」を中核とする国立大学十六校の一つに選ばれ、主要な総合大学として歩み始めています。それに伴って、新しい学部「国際教養学部」が設置されました。

西千葉キャンパスを歩くと、若かりし頃の外観と大きく異なり、太い幹の桜や榊に囲まれた落ち着いた雰囲気、佇まいが頼もしく、誇らしくも感じます。大学が時代の要請に的確に答えて、変革と発展を続けていくって欲しい願うところですが、しかし、その変革の中で、教育学部の募集人員が減じられました。このことは後輩が少なくなっていくことにつながりますので、同窓会として一抹の不安があります。

現在、教育界を担う優秀な人材を地元の大学で輩出し続けて欲しいと、同窓会メンバーによる就職支援を続けており、大学からも期待を寄せら

れています。

これからの大学と同窓会が連携を密にして歩んで行くことは必要なことであると強く思っております。

ところで、教育学部沿革史により、多くの学部の中で最も早く産声を上げました。それから齢を重ねて〇二二年(平成三十四年)には創立百五十年を迎えます。教育学部執行部もそれを視野に入れ、動き出しているようです。

同窓会も大きな節目に向けて大学と協議を重ね、どのような活動を行うべきか、皆さんの同意と協力を得ながら、会長を中心に進んでいかなければなりません。十年、二十年後の社会がどのように変わっていくのか、予測ができませんが、子供たちが希望と自信を持って歩み出せるような援助ができればと考えています。

### 教育学部の変遷

こぼれ話(その一)



黒川 弘

(S 28・3卒  
千葉市)

本稿を委託された黒川弘です。昭和四年生まれの八七歳。昭和二十三年千葉師範学校へ入学、二十四年新制千葉大学教育学部へ入学、二十八年千葉大学教育学部卒業の一期生です。同年、新卒で附属一中に勤務することになりました。そこで同窓会の中核であった板橋佐多雄先生の下で、学内理事として十八年間、役員会、定期総会の下働きをしてきました。その後監事、常任理事、理事をして今日に至っております。

同窓会報には、すでに「現西千葉校地確保に果たした教育学部同窓会の功績」、「亥鼻校地跡の記念碑建立」、さらに「巻頭言」まで書かせていただき、光栄に思っております。学部の発展、同窓会活動を身近に見てきたものの、忘れたこともあり曖昧で恐縮ですが、努力の跡だけは、しっかりと伝えたいと思います。

荒廃した戦後の復興にいち早く動いたのが、千葉大学芸学部創設後援会です。戦時中、教育勅語を中心に、忠君愛國、富國強兵等国策に走ったとして、師範の教育が否定される

風潮の中、新時代の灯がともされたのです。これが総合大学に発展します。発足当初は、目立つ校舎もなく、大学のイメージは全くありませんでした。千葉医科大、千葉薬専、千葉師範、千葉青年師範、千葉農専、千葉工専、東京医科歯科大予科等で構成されたものの、たこ足大学と揶揄されたりしました。最も重要な現在の西千葉校地確保に貢献したのがほかならぬわが教育学部同窓会なのです。もと千葉師範の農業実習地であったとはいえ、広大な東京大学第二工学部跡地の入手、それはそれは難関でした。改めて、時の大蔵大臣水田三喜男先生の英断に感謝しております。

西千葉への統合移転が進んだのはその後で、工学部の創設、学芸部と教育学部で成り立っていた学芸学部が文理学部と教育学部になり、二年課程が統合されるなど、進展がありました。(続く)



千葉県師範学校 正門

同期の絆 ～六百年会の歩み～



池田 一男

(S15・3卒  
千葉市)

昭和十五年三月、千葉県師範学校を卒業に当たって同期会を結成することになり、たまたま皇紀二千六百年であったことに因み「六百年会」と称し、七十五年後の今日まで、続けている。全寮制で全員同じ釜の飯を食べ、強い絆で結ばれていた。

卒業生百四十一名全員が教職に就いたものの、時恰も太平洋戦争勃発の前年で戦雲急を告げ、特に身体に問題のない限り全員現役または召集令状で戦場に送られた。

私は女子部附属小学校に勤務していた。二十年六月十日の空爆で校舎は全壊したが、校庭に防空壕で一命をとりとめた。七月七日の千葉市空襲で住まいは全焼したが、九日には召集令状を受けて入隊するという慌ただしさであった。当時どの学校でも男子教員は戦場に赴き、数少ない年配の教員と女子教員で学校を守っていた。都会の学校では大半の児童が疎開する非常事態であった。

終戦を迎えたが、同期の中には、戦死者、シベリア抑留者もいて、教職を諦めた者もいた。また、教壇に復帰しても教育復興の第一線で激務に追われ、六百年会どころではなかった。

三十七年私の教育センター転勤を契機に、地区代表会員と共に会員の消息を調査した。容易ではなかった。戦死された会員が三十三名おり、戦死年月日及び戦場を念入りに調べ冥福を祈った。

四十四年、結成三十周年を記念し会員の家族写真集「星霜三十年」を刊行した。これには師範時代の担任の先生方も御家族の写真をお寄せ下さり感動した。この年、恩師をお招きして再会記念会合を開催して再建し、以後毎年会合を開催して旧交を温め今日に至っている。

平成二年には「星霜五十年」を刊行し県立図書館にも寄贈した。会員の死去に当たっては会として生花を供え親しい友人が弔辞を述べた。

会員の死去により年々減少し、六十歳時八十三名、七十歳時七十二名、八十歳時四十八名、九十歳十五名、現九十六歳は十名である。絆が太くても齢には勝てないが、学校縁は人生を豊かにする。

卒業を迎えて



大木 学

(H29・3卒  
千葉市)

四年前、教員免許を取得でき、かつ、好きなスポーツについて学びながら将来を考えたいという理由で本学の門を叩いた。教育学部でありながら自由の利く体制に魅力を感じての進路選択だった。

入学してからは、部活動が第一の毎日で、名前の「学」とは程遠い学生生活であったように思う。

私は、体育会の陸上競技部に所属している。高校時代は大した選手ではなかったが、楽しく陸上を続けつつ、競技力を伸ばせたら、というような心持ちだった。陸上競技部は正月に行われる箱根駅伝の予選会に毎年連続で出場しており、一介の長距離部員であった私は、これに憧れた部分も大きかった。予選会には三度出場し、立川の街を駆け抜けた。本選出場には程遠かったが、幸せな時間であった。こんな私の大きな転機は八百メートルという種目との出会いだろう。それまで専門としていた長距

離種目では関東大会に出場できるかどうか、というレベルであった。私が、ふとした理由で転向をしてからは関東大会優勝、リオ五輪の選考会でもある日本選手権で五位と、自分でも驚くくらいの成績を残すことができた。誰よりもグラウンドに足を運んだこと、学んできた知識を多少なりとも競技に生かされたことが、自分に合った競技の選択と重なりこのような結果を残すことができたのかもしれない。私立の強豪校と比べ、国立である本学の環境は恵まれたものではないだろう。しかし、二十キロメートルを走ったり、毎週試合に出場したりと多少常識とは逸脱するようなことでも、自分のやりたいようにできるこの環境が自分には合っていたのだと思う。人にも恵まれ、とても楽しく、陸上競技に浸れた幸せな四年間だった。

部活動のことばかりつらつらと書いてしまったが、適正な努力と思考は結果につながっていくことを学べた重要な期間であったと思う。卒業後は一般企業に就職するが、大学での思い出、学びを胸に、全力で走り続けていきたい。

# 同窓生の美術館



## 『風の日』 神谷 睦代 (S63・3卒・千葉市)



ルネサンスの巨匠ミケランジェロの「ピエタ」像に代表される「母子像」は、ロダンの登場する近代を経て今日に至るまで、彫刻芸術の主なテーマの一つとなっている。

本作品は、私が彫刻の道を志して間もない三十歳の時に、公共の場所での発表を意識しつつ、そうした歴史あるテーマに挑戦する気持ちで制作した。

「自分が彫刻で表現したい母子像のイメージとは？」という問いの下、デッサ

ンを重ねた末に生まれたのが、木枯らしが吹きすさぶ中で身を寄せ合う母子の姿だった。母親はしっかりと我が子を懐の中に抱え、子供を風と寒さから守っている。

一方、子は母の温もりを感じながら、愛情と安心感に包まれて満ち足りている様子である。この情景は、私の幼い頃の経験が基になっている。大切なことは、実は何気ない日々の暮らしの中にあるのかもしれない。

### 編★集★後★記

会報のカラー化に踏み切って三号目、家も三代続けば本物といわれるが、読者の皆様は、どんな御感想をお持ちだろうか。▼今回は、日本歌人クラブ顧問の秋葉先輩に特別寄稿をお願いした。たまたま高津委員が仕えた上司でもあり二つ返事でお引き受けいただけ、幸先の良い編集委員会となった。また、戦前の師範卒業生である池田一男先生からは執筆に合わせ、貴重な資料提供も御提案いただいた。▼ところで、皆様から寄せられた原稿は編集長が会報のページに合わせて打ち直し、それを委員に送付する。委員は担当ページを校正、委員会に持ち寄って再度編集するのだが、これが正直、実に楽しい。読者の皆様にお渡しする前に読める特権(?)でもあるが、本当のところは、同窓生の玉稿の内容や表現力の素晴らしさに啓発されることが多いからなのだ。▼「ねえ、ねえ、この文、素敵じゃない」「えっ、こんなことってあるんだ」「俺もやりてえ」こんな会話が、委員会の定番である。編集委員になってよかった！

一九九五年制作・那須塩原市(にしなすの運動公園)

(文責 八木雅之)